

機関番号：12601
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008 ～ 2010
 課題番号：20520369
 研究課題名（和文） 中国黒龍江省におけるモンゴル族コミュニティの言語接触と言
 語変容
 研究課題名（英文） Language Contact and Language Change of Mongolian Community in
 Heilongjiang Province, China
 研究代表者
 包 聯群 （Bao Lianqun）
 東京大学・大学院総合文化研究科・学術研究員
 研究者番号：40455861

研究成果の概要（和文）：本研究では中国黒龍江省におけるモンゴル人が集中している地域を対象とし、モンゴル語教育状況、言語使用状況、言語意識、言語切り替え、言語接触と言語変異などの側面についてフィールド調査を行い、その言語生活や言語の実態を明らかにした。さらに黒龍江省モンゴル語教育責任者に対していくつかの地域の学校にモンゴル語教育を効率よく実行する方法を提案し、研究成果を還元することが実現できた。これは現地のモンゴル語教育の維持やモンゴル語の継承に少しでも貢献できたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：

In this present study, the author carried out several fieldworks in the Heilongjiang Province of China, where most of the Mongolian nationals are populated. Various investigated tasks including the Mongolian educational status, language use, language attitudes, language shift, language contact, language change, and other related aspects. The author has made clear of the current situations of various Mongolian languages and their daily usage among the Mongol nationality. In addition, the author has proposed different strategies to the local education authority on how to improve the education of Mongolian language effectively in several areas. The proposed strategies have been accepted and are now being implemented. The author concluded that the results obtained from fieldworks are important and useful to the native community. The author is also confident that this study is valuable for the maintenance of education and succession of Mongolian language.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・社会言語学

キーワード：言語学、言語接触、言語変異、モンゴル族、コミュニティ、モンゴル語、中国語

1. 研究開始当初の背景

中国におけるモンゴル族は漢民族との接触が日常的となってきた。特に少数民族自治区である、東北地域の黒龍江省における14万人にのぼるモンゴル族は圧倒的に漢民

族の影響下に暮らしている。20世紀初までに黒龍江省におけるモンゴル族コミュニティではモンゴル語が唯一の日常言語として使用されていたが、筆者の2000年からの数回にわたる現地調査によると、多くの人は

モンゴル語を話すことができなくなっている。一部の人は中国語を使用し、中国語への言語の切り替えを完成し、一部の人はモンゴル語と中国語による混合言語、即ちモンゴル語の文法をベースにして中国語語彙を大量に取り入れたコミュニティー言語を使用している。このような現象について、1980年代から報告があり（吉特 1983、Uyundalai 1990）、他のモンゴル族居住地域においても類似の言語現象が起きているという報告もある（Agula, Xasčimeg 2001 など）。しかし、これらの研究のいずれも詳細な現地調査に基づいたものではなく、言語理論の裏づけも乏しく、確かな研究方法に基づいておらず、信頼性に乏しいものであった。こうした状況を踏まえ、申請者、中国黒龍江省におけるドルブットモンゴル族コミュニティー言語（DMCL）の音韻的・形態的・統語的な記述研究を行い、それに基づいて DMCL の言語変化を促進した教育的・社会的な諸要因を考察し、学位論文にまとめた。申請者の研究では、DMCL は社会言語学者の Bakker and Muysken（1994）などが提唱する混合言語（Mixed Language）の論説に基づき、接触言語である DMCL の形成プロセスを分析し、DMCL の言語変異事例を提供し、「バイリンガル動詞」の存在を論証し、動詞が借用されていることを実証し、バイリンガル形容詞では、中国語起源形容詞の性質形容詞と状態形容詞のカテゴリーが簡略化される点を指摘した。DMCL の名詞拡張形の独自性、類別詞を義務的カテゴリーとせず、類別詞は借用されにくいカテゴリーとわかった。混合言語（ML）の論争について検討し、DMCL が新たな言語を作り出すプロセスに入っていると位置付けた。社会言語学理論の構築に役に立つデータを提供し、また言語変容の理論にとっても資するところが大きい。しかし、そ

の時点では至急に研究しなければならない課題がいくつか残されたままであった。

(1) 博士論文では、調査対象を一つの地域に限定したため、黒龍江省におけるモンゴル族コミュニティー言語の全貌を明らかにしたとは言えない。

(2) 黒龍江省における 141,495 のモンゴル族は 13 市、72 区、65 県に居住しているが、博論は、4 万人以上のモンゴル族が集中し居住するドルブットモンゴル族自治県を対象とした。しかし、漢民族と最も頻繁に接触がある非自治地域、例えば、泰来県（10,255 人）、肇源县（14,221 人）、富裕県（2,237 人）、チチハル市およびその近郊等（5,000 人程度）の地域に居住するモンゴル族コミュニティーの言語についての調査研究が行われていなかった状態であった。

(3) 以上の地域では黒龍江省における 50% 近くのモンゴル族が居住している。非モンゴル族自治地域泰来県、肇源县、富裕県、チチハル市などにおいて、学校教育ではモンゴル語カリキュラムが設けられていない。子供たちが中国語カリキュラムによる教育しか受けられないのが現状である。これらの地域のモンゴル族コミュニティー言語は更に圧倒的に中国語の影響を受けている状況であり、その実態についてはほとんど記述も報告もなかった。

(4) 黒龍江省におけるモンゴル族コミュニティー言語の全貌を解明し、モンゴル語と中国語による接触言語の事例を提供するため、早急な調査研究が必要となっていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中国東北地方の黒龍江省におけるモンゴル族コミュニティーの言語変容の実態を明らかにすることである。

モンゴル語と中国語の急激な接触による言語変異の研究は、モンゴル語と中国語の接触研究に限らず、特にアジア地域全体における接触言語に関するデータの不足を補い、社会言語学における接触言語の理論構築に貢献することであると位置づけられている。また、少数言語、危機言語としては、特定の地域や環境においての消滅に瀕する言語の実態解明およびそのプロセスを明らかにすることによって、この分野の研究にも貢献することができる。

(1) Matras and Bakker (2003 : 2-7)で提案された言語の構造プロファイル (Structural profile) に基づき、DMCL の構造プロファイルを作成し、DMCL の言語構造の実態を明らかにする。この作業を非モンゴル族自治地域の泰来県、肇源县、富裕県、チチハル市などにも行い、言語の構造プロファイルを作成する試みをする。現地調査の言語実態 (基本語彙、文法など) を調査することによって、モンゴル族コミュニティー言語の実態が明らかになる。

(2) 非モンゴル族自治地域の泰来県、肇源县、富裕県とチチハル市およびその近郊等に居住するモンゴル族コミュニティー言語の動詞、形容詞、名詞などの特徴をDMCL のそれと照らし合わせ、共通であるかどうかを考察し、黒龍江省におけるモンゴル族コミュニティー言語の音韻的、形態的、統語的な特徴を明らかにする。

(3) これらの非モンゴル族自治地域に対して、家庭での言語習得、幼稚園、学校教育の状況、公的な場などでの言語使用状況、公用施設でのモンゴル語の使用状況の観察、新聞メディアなどの状況を調べて、アンケート調査およびインタビューによる言語意識の調査も行い、言語生活の実態を明らかにする。アンケート

調査によって、モンゴル語と中国語による混合言語の話者数を把握し、モンゴル人が中国語へと言語シフトした割合、モンゴル語からモンゴル語と中国語による混合言語への言語シフトの割合も見えてくる。

(4) これらの地域での少数民族機関、および公的な場での言語使用状況、モンゴル族コミュニティーにおける民間活動などについても調べ、モンゴル文字の使用実態についても調査する。

本研究は、非モンゴル族自治地域におけるモンゴル族コミュニティー言語の実態を明らかにすることにとどまらず、これまで明らかになっていない中国黒龍江省におけるモンゴル族コミュニティー言語の教育背景、社会的諸要素がモンゴル族の言語変容に与えた影響、言語接触、言語変容の実態を明らかにすることもできる。

3. 研究の方法

(1) 平成20年には、ドルブットモンゴル族自治県、泰来県地域を対象とし、主に

①語彙リスト (基本語彙 200、一般語彙 2,000~3,500 以上) のインタビュー調査票とモンゴル語のすべての文法事項を含むインタビュー調査票を作成し、以上の地域で被調査者を選び、調査を行った。被調査者の選定は異なる年齢、職業、性別、教育背景などを配慮にいれて選択する、10代から70代までの各年代においてそれぞれ5人以上を選んだ。

②泰来県における一万を超えるモンゴル人に関する資料収集を行うと同時に、家庭、学校、関係行政機関を訪問し、町や村での実際の言語使用状況を考察し、モンゴル人を取り囲む教育的、社会的要因を考察する。同時に学校や保護者、一般市民・村民などを対象とした言語使用や言語意識に

関するインタビュー、アンケート調査を行った。言語意識や言語生活に関するアンケート調査を実施する際、地域の事情によって人数を決めるが、100部以上の調査票を作成し、調査を実施した。

③調査後、これらの資料に対する分析を行った。

(2)平成21年には、主に肇源县を対象にした。この地域のモンゴル人に関する研究が白紙の状態であるため、現地での調査がとても重要である。具体的に以下のように実施した。

①語彙リストのインタビュー調査票とモンゴル語のすべての文法事項を含むインタビュー調査票を作成し、被調査者を選び、調査を行った。被調査者の選定も以上と同様に行った。この際、モンゴル人が集中する浩徳、東義順などいくつかの地域を選定し、また分散的に居住する超等村、西義順などの地域のモンゴル人も視野に入れて、調査を行った。

②この地域でモンゴル語教育やモンゴル語の使用状況を考察した。そして、まず、当地域の資料収集に勤め、それから、家庭、学校、関係行政機関を訪問し、町や村での実際の言語使用状況を考察した。浩徳郷、東義順、超等郷、肇源モンゴル族中学校・高校などを訪問し、モンゴル語教育や使用状況を考察した。

③学校や保護者、一般市民・村民などを対象とした言語使用や言語意識に関するインタビュー、アンケート調査を行った。

今までの調査経験を活かし、調査項目を事前に選定し、調査内容がなるべく偏らないように行った。

④最後に上述の資料を分析し、肇源县に居住するモンゴル族コミュニティー言語の実態を明らかにした。当地域のモンゴル語

教育や社会環境などを考察することによって、その言語変異の背景にある要因を探し出し、言語使用と言語意識に関する調査によって、その言語生活の実態を解明することを目標とした。

(3)平成22年には、主に富裕県とチチハル市およびその近郊、ハルビン市内とその近郊等を調査の対象とした。

①富裕県には現時点で2千人以上のモンゴル人が居住し、主に大泉村、小泉村に集中している。調査によって、ほとんどの人はモンゴル語ができず、学校側もモンゴル語教育を実行しておらず、年配者のみモンゴル語と中国語の混合言語を話していることがわかった。

②チチハル市およびその近郊等に5千人程度のモンゴル人が居住している。チチハル市民族中学校・高校は黒龍江省の各地域から生徒を募集しているが、モンゴル人生徒のすべてがモンゴル語を学んでいないことがわかった。近郊の高頭村には500人近くのモンゴル人が居住しているが、年配の方以外はモンゴル語ができなくなっている。

平成22年の調査では、平成21年の調査方法と同様に、各地域のモンゴル族コミュニティー言語の自由談話、物語りなどの録音作業を行い、資料収集を行った。また語彙リストや文法リストを作り、調査を行った。調査によって、こちらの言語は他の地域と異なり、ダグル語、中国語などの言語との接触があり、自らの特徴を持つことがわかった。

また各地域において、言語使用や言語意識調査も行った。知り合いを通じて、いくつかの家庭訪問を実現し、その言語使用の実態を考察した。

そして、チチハル市民族委員会、教育局などの関係機関と連絡し、これらの地域に

関する資料収集も行った。

③ハルビン市内やその近郊等を調査した。ハルビン市内においては、ハルビン職業学院のモンゴル言語文学専攻において、モンゴル人教師や生徒について、アンケート調査を実施し、言語使用状況や言語意識を明らかにすることができた。そして、その近郊にあるモンゴル人居住地において、モンゴル人の言語使用状況を調べた。また、近郊にある和平牧場の五家子村を訪問し、モンゴル語の使用状況を確認できた。

④以上の地域のモンゴル族コミュニティーについての調査を通じて、これらの地域における言語の特徴、および言語の消失が迅速に進んでいる実態を明らかにし、全体像を解明することができた。

4. 研究成果

(1) 中国黒龍江省におけるモンゴル語教育の実態を明らかにすることができた。即ち、ドルブットモンゴル族自治州にはモンゴル語による教育を受ける学級を中学校一年生から高校卒業するまで設置しているが、他の非モンゴル族自治州地域の泰来県、肇源県、チチハル市などの学校では、モンゴル語を外国語のように、第2言語としてしか教えていないことがわかった。また、ハルビン市職業学院においては、三年制の短大としてモンゴル言語文学を学ぶことができている。しかし、調査したところ、クラス全員の中では、黒龍江省出身の一名を除けば、全員は内モンゴルの出身であった。14万人以上のモンゴル人がいるにも関わらず、モンゴル語の教育が不十分であることがわかった（私の提言を受け、黒龍江省教育学院や関係機関の努力で、泰来県の高校、ハルビン市近郊の和平母牧場の小学校においてモンゴル語科目を教え始めた。研究成果を還元できたことが示されている）。

(2) 泰来県、肇源県、ドルブットモンゴル

族自治州、富裕県、チチハル市とその近郊、ハルビン市とその近郊などに居住するモンゴル人の言語使用実態を明らかにすることができた。ドルブットモンゴル族自治州にはモンゴル族コミュニティー言語を用いて日常会話などが実施され、泰来県、肇源県において、一部の集落のみに限られて使用されている。富裕県、チチハル市およびその近郊において、極少数のモンゴル語関係の仕事に従事する人々あるいは知り合いの何人かが集まってお互いにモンゴル族コミュニティー言語を使用する（自分の母語で話そうとする場合）以外、日常言語としてほぼ使用されておらず、この地域の多くのモンゴル人がすでに言語シフトを完成し、中国語を日常言語として用いていることがわかった。

(3) 中国において言語接触の研究は描写する段階に止まっているが、本研究は中国黒龍江省におけるモンゴル族コミュニティーの言語接触や言語変異の実態を明らかにし、言語接触研究の他の事例との比較や新たな言語接触視点を取り入れた研究として、言語接触の分野に貢献することができた。同時に中国黒龍江省モンゴル族コミュニティー言語の構造プロファイルを作成し、言語構造の実態を解明し、アジア地域における接触言語データの不足を補うことができ、社会言語学の分野に貢献できたと位置付けられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

(1) 包聯群、「日本の言語計画」、『中国言語計画』（創刊号）、中国言語戦略センター（中国教育部語信司・南京大学）、169-178頁（印刷中）。商務印書館。（査読有）

(2) 包聯群、「中国黒龍江省ドルブットモンゴル族の言語教育実態」、『東北アジア研究』第12号、2008年、57-78頁、東北大学

東北アジア研究センター。(査読有)

(3) 包聯群、「ドルブットモンゴル族の言語使用と言語意識調査」、『中国社会言語学』、2007年第2期、117-129頁、商務印書館(2008年印刷)。(査読有)

〔学会発表〕(計11件)

(1) 包聯群、「多言語使用と言語教育実態—中国黒龍江省のモンゴル族を事例として—」、多言語研究会、東京にて、2011年5月28日。

(2) 包聯群、「首都圏における多言語表示・多言語使用と日本政府の観光政策について」、第八回都市言語研究国際シンポジウム&第二回日中若者語研究ワークショップ、2010年6月25-27日 中国長春にて開催(南京大学&吉林大学主催)。

(3) 包聯群、「混合言語—DMCL / OML / MICHIF / MEDIA LENGUAの比較対照研究」、2010年2月27-3月4日に九州大学にて、学術振興会による「日本—欧州先端科学セミナー若手研究者日本20人、欧州20人)に選出された。会議タイトル:「アジアとヨーロッパにおける帝国と周辺: 複雑性、偶発性、因果性」

(4) 包聯群、「中国黒龍江省肇源县モンゴル族の言語教育、言語使用に関する調査研究」(台湾、「『字義』論述」シンポジウム、2009年12月19-20日、台北大学にて)。

(5) 包聯群、「モンゴル語に対する中国語の影響—都市部へ移住後のモンゴル族の言語維持と言語変化—中国黒龍江省のモンゴル族を事例として—」、『Asia University 3rd International Conference on “Globalization’ and Chinese Narrations”』、2009年12月17-18日、台湾アジア大学にて。

(6) 包聯群、「中国黒龍江省におけるモンゴル族の言語接触と言語変異」、千葉大学モンゴル語研究会、招待講演 2009年11月20日。

(7) 包聯群、a. 「モンゴル語に対する中国語の影響—中国黒龍江省モンゴル族コミュニティ言語の数名詞の構造変化について」、

b. 「“段階性”をもつ言語シフト—中国黒龍江省ドルブットモンゴル族の言語を事例として—」、NTUTAPPLINGX: 2009 – Applied Linguistics and Sociolinguistics: The Form and the Content、国立台北科技大学にて。2009年11月6-7日。

(8) 包聯群、「ドルブッドモンゴル族コミュニティ言語—混合言語のケース」、『国際バイリンガルシンポジウム』(2009年7月9-13日、オランダのユトレヒト大学にて、英語)。

(9) 包聯群、「中国黒龍江省におけるモンゴル語と中国語の言語接触—モンゴル語の言語変容の調査」、日本大学文理学部&モンゴル民族文化基金学術交流会シンポジウム、2008年12月13日、日本大学(文理学部)。

(10) 包聯群、「ドルブッドモンゴル族コミュニティ言語の特徴について」、南京大学社会言語学実験室5周年記念国際シンポジウム(2008年6月21-25日 南京大学にて)〔図書〕(計2件)

(1) 包聯群、『言語接触と言語変異—中国黒龍江省ドルブッドモンゴル族コミュニティ言語を事例として—』、2011年2月、460頁、(株)現代図書。単著、査読有(研究成果公開促進費による審査)。

(2) 包聯群、「ドルブッドモンゴル族コミュニティ言語」、2010年、『社会言語学実験教程』(徐大明主編、北京大学出版社)、106-111頁、単著(査読有)。

〔その他〕ホームページ等:
調査に関する中国の報道(HP): 中文 Word データベースよりダウンロードできる。
http://www.wordwendang.com/daxue_liaoning/04/108483.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者: (包 聯群)

研究者番号: 40455861

(2) 研究分担者: (栗林 均)、東北大学東北アジア研究センター・教授 研究者番号: 30153381 (H20→H21: 研究分担者)